

「いま問う、チャネリングの意味」

リサ・ロイヤル・ホルト氏へのインタビュー

質問・編集： 星名一美

著作権：(有) ネオデルフィ&ロイヤル・プリースト・インターナショナル

「チャネリングとは何か？」 この問いへの、しっかりした答えが出されないまま、言葉だけが定着した感のある「チャネリング」。洗練された情報を提供することで知られるアメリカのチャネラー、リサ・ロイヤル・ホルト氏に、チャネリングをめぐる虚実について語ってもらった。

◆ チャネラーになったきっかけ

——チャネラーになったきっかけと、受けたトレーニングについて話してください。

リサ——私の場合、いろいろな状況が発展して、ごく自然にチャネラーになる道を選びました。一番のきっかけは、1979年に起きたUFOの目撃体験でしょう。それを機に、宇宙や未知への探究心が、以前にも増して高まりました。当時、大学で心理学を専攻していた私は、ストレス管理のために自己催眠を学んでいました。自分を変性意識の状態に導く方法を学んだこと、そして、未知への探求心から、自然にチャネラーになっていったのです。

正式な訓練も受けました。日本でも「バシヤール」のチャネラーとして有名な、ダリル・アンカ氏のチャネリング・セッションに、1984年から出席するようになりました。同じころ、とても印象に残る夢を見ました。ある意識体が現れて私のチャクラに触れ、「これからあなたはチャネラーになる」と告げられたのです。こうした体験の後、興奮と怖れが入り交じるなか、バシヤールの個人セッションを受けました。そして、バシヤールから、LAで間もなく開かれるチャネリング能力習得のためのクラスに参加するように勧められたのです。私はすぐに申し込みました。でも、私のトレーニングは、クラスが始まる数か月前から、すでに始まっていたのです。その頃から見えないガイドたちの存在を強く感じるようになり、彼らのエネルギーが私のエネルギーと融合した状態で、体を動かしたり話しをするレッスンが始まりました。

私が受けたトレーニングは包括的なものでした。チャネラーにとって一番大切なのは、自分をできるだけクリアな媒体にすることです。そのためには、人間として成熟することが欠かせません。クラスでは、顕在意識にある恐怖心やブロック（エネルギー的な滞り）の解消、誘導瞑想を通じて、潜在意識にある根源的な恐怖心や怒り、自他を裁く心などの解消にも焦点が当てられました。タロットカード、ウイジャボード（日本の「こっくりさん」に当たる）、ルーンなどを使った、一般的な超能力の開発も行いました。クラスは週に1回4～5時間行われ、その他にも、生徒だけで週1、2回、最高15時間くらい会って練習を重ねるといった熱の入ったものでした。

——現在あなたがチャネリングしている主な意識体は、「ジャーメイン」と「サーシャ」ですが、彼ら以前にチャネリングしていた存在はいますか？

リサ——一番はじめにコンタクトしてきたのは、「クァン」という名の古代中国の哲学者でした。そのほか実にたくさんの存在をチャネリングしました。なかでも縁が深かったのは、「リディア」という集合意識で、ロスに住んでいた頃、3年間チャネリングしました。「リディア」は、私が現在チャネリングしている「ジャーメイン」の女性的側面だといえます。チャネラーとしての能力を高めていく過程で、一時的な先生の役割を果たしてくれた導き手がたくさんいましたので、正直なところ、すべての存在は覚えていません。

◆ 誤解されているチャネリング

——アメリカにおけるチャネリングの簡単な歴史と、現在、チャネリングがどのように受け止められているかについて教えて下さい。

リサ——19世紀の降霊術ブームを経て、近代のチャネリングの先鞭をつけたのは、おそらくエドガー・ケイシーでしょう。彼は、後々、実証することが可能な預言や医療リーディングの分野で大きな功績を残しました。「チャネラー」という枠にはめることができない、独自の世界を築き上げた偉人です。50年代には、ET情報のチャネリングの分野でパイオニアといえる、ジョージ・ヴァン・タセルがいました。私個人が、近代のチャネリングのパイオニアだと思うのは、ジェーン・ロバーツです。彼女のチャネリングは主に60年代に行われましたが、チャネルされた情報の十分な評価は、70年代から80年代に至るまで続きました。リアリティーの本質や輪廻転生などの幅広い分野に言及し、バランスがとれていて、しかも知的で洗練された情報を提供してくれた、はじめてのチャネラーでしょう。

そのほか、「チャネリング」という現象を有名にするのに一役買ったチャネラーに、ジェイジー・ナイツとケビン・ライアソンがいます。しかし、チャネリングの認知度が上がるにつれて、多くの誤解も生まれました。80年代、マスコミがこの現象を取り上げると、実態がかなり歪められました。チャネラーの人格やチャネリング情報を、故意に歪めたり、茶化すような風潮が生まれ、チャネリング全般のイメージが低下しました。現在、一般的なアメリカ人の大半がチャネリングを知っていますが、彼らが本当にそれを理解しているかどうかは疑問です。実際にセッションに参加して、直接的な体験を通して受け入れられない限り、チャネリングへの真の理解は生まれません。敬虔なキリスト教徒の中には、「チャネリングは悪魔の仕業だ」と信じている人もいます。アメリカでは日本よりもチャネリングへの偏見が多いといえるでしょう。

◆ スピリットの世界に上下関係はない

——日本の古来のチャネリングでは、先祖霊の降霊が多かったのですが、アメリカのニューエイジ運動

のなかで復活したチャネリングでは、ET、天使、マスター、過去に人間だった指導霊、集合意識、光の存在、自然霊など、実にさまざまな意識が登場してきますね。こうした存在に、霊界におけるランクづけはありますか？

リサ——この質問への答えは、チャネラーによって違います。「スピリットの世界には上下関係も階級制度もない」というのが、私個人の意見です。企業組織を見ればわかるように、私たちの社会には上下関係があります。何事にもレッテルを貼らないと気がすまない私たちの意識がヒエラルキー（階級制度）を生んでいるのです。しかし、スピリットたちによれば、得意分野の違いはあっても、彼らの間に階級制度はないといえます。クリアーでない、つまり、自分の意識の浄化を怠っているチャネラーのなかには、チャネリングされる存在の上下関係にこだわる人もいますが、少なくとも私が知るかぎり、スピリットたちは平等な宇宙に住んでいます。

——神託、神降ろし、イタコ、降霊術など、呼び名は違っても、チャネリングの伝統は、太古から連続と続いてきましたが、近代になって、アメリカを中心とする、いわゆる「ニューエイジ運動」の興りとともに、チャネリングが新しい形で普及し始めたのはなぜでしょうか？

リサ——いくつかの理由があるでしょう。人類は、今、飛躍的な進化の時を向かえています。大きな時代の節目には、必ずといってよいほど、霊的な世界へ回帰する時期があります。現在も、こうした「節目」にあたっています。また、現代は高度技術社会のために、自然や宇宙から切り離されていると感じる人が多く、霊的な世界への回帰志向が高まっているのです。自然や宇宙と一体になった状態こそ、人間にとっての自然な姿ですが、チャネリングは、こうした「一体感」を取り戻すためのひとつの方法といえるでしょう。

——よく、「現在、世界は3次元から4次元に移行中である」とか、「アセンション（次元上昇）の最中にある」といった情報を耳にしますが、近代的なチャネリングの普及は、今、進行中とされる次元上昇と関係がありますか？

リサ——あると思います。大勢のチャネラーが、共通のメッセージを出しています。そのひとつが、「現在、地球の周波数は上昇しつつあり、人類もそれに見合う変容を遂げている」というものです。もしこれが正しければ、私たちは、自分自身の可能性、特に意識の可能性を広げる最中にあると言えるでしょう。チャネリング中のチャネラーの脳波は、すべての脳波が同時にピークの状態になっているという研究結果があります。残念ながら、こうした分野での本格的な研究はまだですが、チャネリングのプロセスそのものが、人間の意識を広げることに役立つと私自身は思います。

◆ チャネリングのメッセージには共通性がある

——これまでに、いろいろな情報をチャネリングしてこられました。他のチャネラーの情報に接して、

チャネリング情報一般に共通するメッセージはありますか？

リサ——はい、間違いなくあります。なかでも「人は自分の現実の主である」というメッセージが、その代表でしょう。こうしたメッセージの土台に、「人は思考と感情で現実を創っている」という考え方があります。他によく聞くメッセージに、「人類は銀河系宇宙家族の一員だが、まだその自覚がない」とか、「現在、人類は大きな変容の時をむかえている」というのがあります。また、「他者を崇拝するのではなく、内なる神を見出せ」というのも、大切な共通メッセージです。「仏陀やイエスを模範として敬い、彼らの教えを実践するのはよいが、彼らを神として崇拝の対象とすべきではない」という意味が、そこには含まれています。

——よくあなたは、「チャネリングはチャネラーと意識体との共同作業である」と言いますが、具体的にはどういう意味ですか？ よいチャネリングを決定付ける条件は何ですか？

リサ——チャネリングが「降霊術」と呼ばれていた時代、霊媒は霊に体を貸すだけの存在でした。両者の間にはパートナーシップはなく、霊媒は霊が語る内容も知らず、セッションが終わると疲れて倒れるのが常でした。これに比べると、チャネラーがチャネリングのプロセスから学び、成長できる現代のチャネリングは、はるかに健全です。最近のチャネリングは、半意識状態（セミコンシャス）で行われるものが多いのですが、この状態ですと、意識体はチャネラーの意図に反することはできません。もしセッション中に送られてくるエネルギーが強すぎるときには、チャネラーは意識体に対して、エネルギーのレベルを下げるように頼めばよいのです。またチャネラーは、意識体がもたらす癒しやメッセージを通して、自分を癒したり学ぶこともできます。

◆ 人間的に成長することが、クリアーなチャネラーになる必須条件

リサ——意外でしょうが、優れたチャネラーの条件は、本人の人生に対する姿勢です。よく、「フルトランス（無意識の状態）で行われたチャネリングが一番純粹だ」という誤解があります。でも私は、チャネラーがフルトランスのときに出した情報が、憎悪、裁きの心、あるいは、被害者意識に満ちているケースをいくつも知っています。ですから、「フルトランスの状態で行われたチャネリングが一番純粹」という考え方が、正しいとは思いません。結論を言うと、優れたチャネラーとしての資質を備えた人とは、「自分を成長させることに強い熱意をもっており、恐怖心や挑戦に立ち向かって、常に自分をより良く、より力強い存在にする努力を怠らない人」のことで、何よりも大切なのは、こうした姿勢をもってることであり、「セミコンシャス」、「フルトランス」といった、チャネリングのときの意識状態は、さほど重要な要素ではありません。

——意識体はチャネラーの語彙を使ってメッセージを伝えてくるのですよね？ もしチャネラーに偏見やブロックがある場合は、どうなりますか？

リサ——チャネラーに偏見があると、それが細胞レベルにおいてコード化されます。チャネリング時のチャネラーの意識状態が、無意識、半意識にかかわらず、こうした観念のコードは細胞レベルにありますから、メッセージ自体が純粋な源から来ていると、こうしたコードがあるかぎり、チャネラーの口から出てくる情報には、すべてフィルターがかかるのです。細胞レベルのコードが、メッセージの内容を自動的に歪めてしまうのです。赤いサングラスをかけると、見るものすべてが赤く見えるのと同じです。こうした「フィルター」をなくす努力をしなければ、いつまでも事態は変わりません。だからこそ、恐怖やブロックを解消するといった自己練磨のプロセスが、クリアな媒体になるために欠かせません。

◆ チャネリングは万能ではない

——よく、チャネリング能力を習得したら、すべての問題が解決して、何も努力をする必要がなくなると思っている人がいますが、お話を伺っていると、それはまったくの誤解なのでしょうか？

リサ——その通りです。チャネリングを学びたいと思っている人の多くが、こうした誤った期待感をもっています。チャネラーの私が言うのですから間違いありませんが、チャネリングは万能ではなく、決してすべての問題を解決してはくれません。意識体たちは助言こそすれ、障害を取り除いてはくれません。チャネラーが問題を克服して成長し、さらに純粋な媒体になって、よりピュアな情報が伝えられるようになることを意識存在たちは望んでいるのです。「チャネリングは万能」といった誤った期待感をもって学ぶと、後々がっかりするでしょう。

——チャネラーやチャネリングに対して人々が持っている最大の誤解や偏見は何ですか？

リサ——たくさんありすぎて、答えるのに困ります。一般人はマスコミを通して、チャネリングを知りますが、マスコミのもっぱらの関心は、物事の本質とは無縁なゴシップ記事を面白おかしく書いて、人々の好奇心を煽ったり一時の娯楽を提供することです。精神世界全般に対するアメリカのマスコミの姿勢が、ゴシップ週刊誌とあまり変わらないのは残念です。よく耳にするチャネラーへの中傷に、「チャネリングは単なる金儲けの手段」というのがありますが、これはまったくの誤解です。プロのチャネラーよりも、普通の会社員の方が、収入はずっと安定しているからです。「チャネラーは皆変人」といったイメージの出所もマスコミです。

ある大学がチャネラーを対象に行った調査によって、一般人がチャネラーに対して抱いているイメージが、まったくの虚像であることが明らかになりました。調査によると、平均的なチャネラーは、人格や感情のバランスがとれており、相対的に教育水準が高く、豊かなイマジネーションの持ち主ではあるが、同時に地に足をつけて暮らしていることがわかりました。一般人がチャネラーに対して持っているイメージは、「地に足がつかないクレージーな人」というものです。調査の結果とは、正反対ですね。偏見を持つ前に、客観的な調査の結果を、ちゃんと読んでもらいたいものです。

◆ チャネラーになると楽観的で力強くなれる

——チャネラーになったことで、あなたの人生はどう変わりましたか？

リサ——チャネラーになってから、多くの年月が経ち、今では、チャネラーでない自分を想像できません。まず、「自分こそ自分の人生の主だ」と実感できるようになったことが、第一に挙げられる変化です。以前よりも望ましい現実が創れるようになりまし、深刻な問題に直面しても、楽観的な姿勢で乗り越える力が持てるようになりました。

——自分が聞きたい質問は、どうやって聞くのですか？

リサ——いくつかの方法があります。一般的なものは、質問を紙に書いて、自分がチャネリング状態の時に、友人に質問を読みあげてもらう方法です。他人の問題に答えることに抵抗はなくても、自分についての情報をチャネリングするには、多少抵抗があるものです。他に、質問の内容を心のなかで宇宙に送り、答えを待つという方法もあります。すると、インスピレーションとして答えが来たり、何らかの状況が起きて、体験を通して答えが得られることもあります。意識体たちは、直接、私の耳元に答を囁いてはくれませんが、体験を通してレッスンを学ぶことに私は満足しています。その方が、パワフルな学びになるからです。

——「チャネラーは、生まれる前からチャネラーになることを決めている」といった話を聞きましたが、あなたの場合はどうですか？

リサ——プロのチャネラーになることを決めていたかどうかは別として、少なくともチャネリングをすることを決めていたことは間違いありません。子供時代、友達と遊んでいるときに、よく、「私はプレアデスから来たのよ」と言っていたのを覚えています。きっと子供のころから、プレアデス人の「サーシャ」からインスピレーションを受けていたのでしょう。ちなみに「サーシャ」は、私のフューチャー・セルフ（未来生）でもあります。また、チャネラー養成コースに通う前のことですが、ある時、サウナに入っていると、「準備はできていますか？」とテレパシーで誰かに聞かれたことがあります。UFOの目撃体験を含めて、すべての出来事が、私がチャネラーになるための「伏線」だったのでしょ。

——ところで、ハイアーセルフとチャネリングされる意識体は、どんな関係にあるのですか？

リサ——とても良い質問です。ハイアーセルフは、私たちの意識の最高峰ともいえる部分で、「内なるキリスト意識」（仏性）であり、神との接点でもあります。たとえ私たちが現実のレベルで混乱に陥っていても、ハイアーセルフはいつも行くべき道を知っており、その方向へとあなたを導こうとします。チャネリング能力をマスターする上での優先課題は、まず、ハイアーセルフとの結びつきを確立することです。チャネリングはあくまでもその副産物なのです。

別の意識体をチャネリングするとき、ハイアーセルフは電話の交換手のような役割を果たします。チャネリングされる意識体は、あくまでもハイアーセルフを通してメッセージを伝えてきます。車の運転にたとえるなら、ハイアーセルフは運転手です。あなたの人格（パーソナリティー）は後部座席に座っている乗客で、チャネリング中は目を閉じて休んでいます。意識体は、助手席に座って水先案内をしてくれますが、運転手はあくまでも、あなたのハイアーセルフです。このように、意識体をチャネリングするプロセスは、ハイアーセルフと意識体との共同作業なのです。

◆動機次第でチャネラーの道は「歓び」にも「苦行」にもなる

——これからチャネリングを学びたい人に、アドバイスをお願いします。

リサ——チャネリングが始まると、間違いなくあなたの成長が早まります。そのプロセスを通して、あなたは以前とはまったく違った人に生まれ変わるでしょう。まずは、自分が生まれ変わることへの心の準備が必要です。「自分をさらに高めたい」というのが、チャネラーになるための理想的な動機でしょう。「よりよい人になりたい」とか「心から人に奉仕したい」といった動機があれば、きっとあなたはクリアで優れたチャネラーになれるでしょう。でも、チャネリングを万能と思い込み、問題と向き合うのを避けたり、我欲のたすために、自分の能力を使うなら、あなたの人生はいばらの道になるでしょう。説教めいて恐縮ですが、優れたチャネラーになるためには、一にも二にも練習です。ときには自信が揺らぎ、自分のチャネリング能力を疑うかもしれませんが、練習を続ければ疑念もやがて晴れるでしょう。

インタビューの中で何回か繰り返しましたが、チャネリングはチャネラー本人の成長のプロセスと密接に結びついています。自分の意識を清明にするには、潜在意識に押し込めてきた恐怖心、無価値観、偏見、子供時代の心の傷、愛の欠乏感、過去生から持ち越した否定的なパターンなど、数多くの問題を白日のもとに晒さなければなりません。自分に合う瞑想法や練習を通して、日々精進しつつ自分の成長を優しく見守ってください。途中で自分を裁いたりヤケを起こすのは禁物です。

——ありがとうございました。

©1998, 2012 by Lyssa Royal Holt

www.lyssaroyal.com